

桑江良逢

オーラル・ヒストリー

第1回

開催日 2007年6月5日(火)
開始時刻 14時00分
終了時刻 16時30分
開催場所 桑江良逢先生ご自宅

【インタビュアー】

岡田志津枝 (防衛省防衛研究所 戦史部所員)

山口 真司 (防衛省防衛研究所 戦史部所員)

記録者 有限会社ペンハウス 神門恵子



1-02

桑江良逢氏略歴

年 月	略 歴
大正11年 1月	沖縄県に生まれる
昭和11年 3月	沖縄県立第1中学校2年修業
4月	広島陸軍幼年学校入校(第40期)
昭和13年11月	幼年学校卒業
12月	陸軍予科士官学校入校
昭和14年12月	陸軍予科士官学校卒業、隊付教育(歩兵第32聯隊付)
昭和15年 4月	陸軍士官学校入校(第55期)
昭和16年 7月	陸軍士官学校卒業、第24師団歩兵第32聯隊配属
10月	少尉任官(聯隊旗手)
昭和17年12月	陸軍戸山学校入校(~18年12月)
昭和18年 3月	中尉
12月	歩兵第32聯隊第12中隊長
昭和19年 2月	歩兵第32聯隊第3大隊南方派遣(関東軍第7派遣隊)
4月	西カロリン諸島メレヨン島上陸、同地守備
5月	独立混成第50旅団歩兵第335大隊第2中隊長(編成改正)
12月	大尉
昭和20年 9月	日本帰還
10月	復員、農漁業に従事
昭和27年 9月	警察予備隊入隊、1等警察士
11月	保安隊第12普通科連隊第12中隊長
昭和29年 8月	3等陸佐
昭和30年 3月	富士学校普通科部火器班教官
昭和31年 8月	幹部学校入校(第2期指揮幕僚課程)
昭和32年 8月	富士学校普通科部研究員・教官
昭和35年 8月	2等陸佐
昭和36年 3月	防衛大学校第3大隊指導官
昭和39年 8月	中部方面總監部第1部人事班長
昭和42年 7月	1等陸佐、第10普通科連隊長(滝川)
昭和44年 7月	防衛大学校訓練課長
昭和46年 8月	西部方面總監部付(沖縄移駐部隊指揮官要員)
昭和47年 3月	臨時第1混成群長
10月	群主力沖縄移駐
昭和48年 3月	臨時第1混成団準備本部副本部長
10月	第1混成団副団長
昭和49年 4月	陸将補
7月	第1混成団長
昭和51年 8月	第1混成団付
昭和52年 1月	退官
昭和55年 6月	沖縄県議会議員(~昭和63年6月)

桑江良逢オーラル・ヒストリー質問項目①

2007年6月5日

- 1 先生は、広島幼年学校、陸軍士官学校、陸軍、警察予備隊、保安隊、そして自衛隊と一貫して軍人の道を歩んで来られました。その動機はどのようなものだったのでしょうか。
- 2 先生は西カロリン諸島のメレヨン島で終戦を迎えられますが、この時、どのようなお気持ちを抱かれたのでしょうか。
- 3 先生のご出身地である沖縄が戦場となり、ご家族が亡くなられ、原隊の歩兵第32聯隊も同地で敢闘の末に大きな損害を受けましたが、この沖縄戦は先生の人生にどのような影響を与えたのでしょうか。
- 4 復員後、警察予備隊入隊までは、どのような生活を送られていたのでしょうか。
- 5 1952年（昭和27年）、先生は警察予備隊に入隊されますが、入隊の動機や経緯はどのようなものであったか、お聞かせ下さい。
- 6 1945年（昭和20年）7月に発表されたポツダム宣言の内容は、いつ、どこで初めてお知りになられたのでしょうか。また、「日本の主権は本州、北海道、九州、四国及び我々の決定する諸小島に限定されなければならない」との条項が含まれていましたが、先生は沖縄の将来についてどのような見通しをお持ちでしたか。
- 7 1950年（昭和25年）11月に米国の対日講和7原則が発表され、この中に「合衆国を施政権者とする琉球諸島及び小笠原諸島の国際連合信託統治に同意し」の条項が含まれていました。先生は当時、この内容についてどのような感想を持たれましたか。

■陸軍幼年学校への入校

山口 それでは、よろしくお願い致します。まず、第二間目、先生は、広島幼年学校から陸軍士官学校、それから警察予備隊、保安隊、自衛隊と、一貫して軍人としての道を歩んで来られたけれども、その動機についてお話し頂きたいと思ひます。桑江 これだけで二〇三〇分になるよ（笑）。それが、いちばん大切なことだからな。その前に、まず桑江家だ。分家して、長男、長男と行くだろう。分家したのを方言で「立口（たちぐち）」と言う。僕が六世だ。さらに、「桑江良逢」だろう。僕ら以上の年齢で、沖繩で名の上に「良」が付くのは九〇何パーセントまで侍の馬氏（ばうじ）の門中ですな。それからすると、一六世になるわけだ。

それで、その六世に生まれたわけだ。そうすると（自分が）六世、親父が五世、祖父さんが四世になるね。祖父さんは覚えてない。祖父さんは覚えてないが、祖父さんの時に廃藩置県で、侍だったのが侍を辞めて、それで祖父さんの代に酒屋を興した。だけど、僕が小さい時に死んで、その祖父さんは覚えてない。だから、親父が五世になる。その親父はよく覚えてるが。それで、いよいよ、これ（質問）の本題に入る。

幼年学校というのは、君らは分かるだろうが、何故、そんな幼年学校を受けようと思ったかという問題だな。これはね、もちろん、幼年学校の生徒にも、将校の子供とか、軍人の子供は、幼年学校というのは何だってことは、これはかなりよく分かるとる。僕はよく知らない。知らないがな、あの頃、子供の読物で、『少年倶楽部』というのがあった。講談社出版で、大人には『キング』、それから『少年倶楽部』『少女倶楽部』。その『少年倶楽部』が愛読書。『少年倶楽部』の連載小説にね、山中峯太郎の『星の生徒』。これは、今でも、また復本して売っ

とるはずだよ。（防衛研究所にも）誰かの寄贈したのがあはずだよ。

岡田 私も読みました。

桑江 そうだろう（笑）。今読んでもね、「何であんなに感激したんだろう？」と思うが、とにかく、あの頃ね、「ああ、こういう学校が、こういうところがあるのか。これに行ってみよう」と。だから、おそらく、君達は、「将来、大將になるう、元帥になるう」ぐらいに思うて入ったと思うだろう？ 全然、そんなことはない。『星の生徒』に書かれた幼年学校の生活というのが、「じつに良いな」ということで、それで幼年学校に。山中峯太郎自身が、幼年学校、士官学校に行つて、軍隊を辞めて、それで作家になった人間。だから、山中峯太郎の『星の生徒』を始め、『大東の鉄人』とか何か、そういう小説をいっぱい愛読しとる。それで幼年学校を受けようと思ったわけだ。

中学校の一年の時に、親父に「受けたと思う」と言つたら、「駄目だ。お前は酒屋を継がせるから駄目だ」と言われて受けられん。受けられんで、二年になった。幼年学校の入学試験は、中学校一年二学期程度である。後は、学校の勉強も、授業中、聞くだけだ。家に帰つたら、一年の本を引つ張り出して、一年のを一所懸命勉強した。いや、俺の人生でね、本気で勉強したというのには、その幼年学校受験の中学一、二年の間だな。遊びたい盛りに、しかも夏休みに家で勉強をして。酒屋をしとつたから離れて。酒屋は、月に一回、税務署の検査がある。その検査の受検の部屋が、いつもの勉強室だ。その勉強室で、濡れ手拭いを鉢巻きにして、一年の本を一所懸命に勉強。親父、それを見とつてな、「そんなに希望するのなら受ける」と。だから、二年の時に受けた。酒屋は次男か三男にでも継がせようというので、判子を押したのが運命の分かれ道だ。

いや、親父も兵隊に行つてゐる。沖繩の兵隊は第六師団、熊

本、鹿兒島、宮崎。それから、北九州は第一二師団だな。両方おるよ。全部、分かれて行きよったんだ。親父も大分の四七聯隊。だから、まあ、幼年学校というのは知っとったんじやろう。やっぱり兵隊に行つとるんだからね。でも、「あんなに希望するなら受けさせようか。よもや（試験に）通るまい」と思うとる。それが通つたもんだから、今さらやめるわけには行かんしな。いや、あの頃も『琉球新報』はあつた。三段抜きで載つたよ。沖縄から、士官学校とか兵学校は、まあ、毎年一人か二人は通りよつた。幼年学校は一人も通らないんだ。『琉球新報』に載つた。一八年振りだ。沖縄から、一八年振りに幼年学校に合格。

そうなつたらね、親父も、今さらやめるとか、そういうようなことは到底できない。ただ、今から考えても、親孝行になつたなということは、幼年学校に入れば、まあ、普通に行けば、将校になるわな。そういう目途が付いた。それと入校式。広島幼年学校の入校式に、親父も付いて行つた。それで、厳島神社か何か、全部見た。親父は、久し振りで本土旅行ができたわけだね。その意味では、その分だけ親孝行にはなつとるわけだ。で、親父は、その秋に亡くなつた。それが幼年学校。（質問表の）第1項になるかな。

それで、幼年学校に入った。入つた時は、将校の子供以外は、大将になろうとか、大臣になろうとか、そんなことは全然考えてないよ。幼年学校の生活の『星の生徒』が何（きつかけ）だつたから。お互い聞いても、そう言つた奴が多かつたもの。まあ、将校の子供とか何とかは、それは分かつとるから良いんだがね。そういうことで。

しかも、その幼年学校は、僕が入つた昭和一一年から、広島幼年学校が再興になつた。幼年学校が明治から六つあつたのが、大正の軍縮で、逐次、減らされ、減らされた順序にまた復活し

て、僕が入つた昭和一一年に広島が復活、昭和一二年に仙台が復活、一三年に名古屋、大阪、熊本と、六つ全部（復活）。だから、僕の時には広島と東京だけだから、中部地方から以西の近畿、中国、四国、九州出身者は広島。それから東は、東北、北海道までが東京。二分されてね。二分されたが、幼年学校三年間、上級生なしだ。

山口 そうなりますね。

桑江 殴られんで済んだよ（笑）。いや、それもあるしね。これは、後々の何にも関連して来るが、広島幼年学校、ずっと通しにして四〇期生だ。いや、廃校になつて、間もない期があるんだが、通し番号で言つとるんだ。四〇期だ。東京も四〇期だ。それで、東京の方はずっと続いているだろう。それだから、昔からの、伝統とか、仕来たりとかで、騎兵希望が多かつた。騎兵というのは馬に乗つて、軍の最たる花形だつたんだよ。

山口 そうですね。

桑江 ところが、だんだん時代が現代戦に変わつて、それでも、やっぱり、戦車兵とか、装甲兵とか、東京にはそれが多かつた。広島幼年学校は再興だから、そんな影響はあんまり受けない。航空兵希望が多かつた。飛行機乗り。それだからね、大東亜戦争で、戦後、僕が調べたことがある。日本でも、軍学校といつたら、兵学校もあるし、機関学校もある。日本ばかりじゃなく、世界各国の軍学校で、戦にあつて、その戦で同級生の半分以上、五〇パーセント以上戦死したというのを（調べて分かつた）。大体、防研辺りで調べたことがあるかな。

山口 聞いたことはないです。

桑江 そういう基礎資料というのは重要だ。俺が調べた範囲じやね、五〇パーセント以上は、広島陸軍幼年学校四〇期だけ。五五パーセントだつたかな。東京幼年学校、三〇何パーセント。陸士全部で期から言つと、五四期、五五期、五六期がいちばん

死亡率が多い。その中でも、まあ、五五期が多いんだが、五三期以前は少ないよ。この同じ日本で、五三期以前は、大隊長とか何とかで、後ろにおるのが多いから。それと、日本で五七期も。そんなに、五六期とか五五期ほどじゃないが、特攻隊が五七期だ。数から言ったら。でも、そんなには行つてない。全部から言ったら、五四期、五五期、五六期だ。これが、ちょうど一八年、一九年、二〇年という、いちばん苦しい戦の時の、第一線の中隊長ぐらい。それだから、戦没率が多いんだ。それで、広島幼年学校だけが、五〇パーセント超しとつたね。

■士官学校から満州へ

桑江 いや、それで、今度は、俺個人になるが、予科士官学校を出る時に兵科が決まるんだ。ところが、幼年学校では、身体検査は、「予科士官学校卒業の時に、一メートル五五センチ以上になる見込みのある者」だ。

山口 見込みのある者ですか(笑)。

桑江 だからね、俺より、まだ酷い奴がおつた。まだ小さくて、それで少尉になったり。まあ、俺は晩稲(おくて)だった。早稲(わせ)、晩稲とあるじゃろう。晩稲だったな。昔は将校服というのは私物だものね。士官学校卒業時に作る。そういうので、士官学校卒業の時、ちょうど二十歳かな。二二、三才まで延びたんだ。だから、将校服はつんつるてんになるし、襟のホックが掛からんというふうだったんだね。

航空は、希望率から言ったら、九九パーセント。後、一パーセントが歩兵だ。そしたら、まだ小さいものだからね、予科士官学校卒業の時の航空の身体検査で、身長は事前に行つて測つたら、ぎりぎりか、駄目だな。一メートル五五以上ないんだ。それで、朝、服装検査の時に、週番士官から「髪伸ばしとるか、髪を揃んどけ」と。こっちは、もう、航空兵になりたい一

心だから、「揃んどけ」と言われたって伸ばしとる。「昨日も注意したのに、何故揃まんか！」と弾き飛ばされて、それでも我慢してね。いよいよ、その身体検査の日、どうも自信ないもんだから、どうしたかと言つとね、砂を伸びとる髪の毛の間にに入れて測つたら、身長はなんとか通つた。ところが、二次試験が校外だったな。どこへ行つたかな。肺活量で落とされた。肺活量はどうにもならん。小さいですね。仕方なく、歩兵になつた。

それで、この前(インタビュー前の打ち合わせ時)も言つた三三聯隊だ。ところが、三三聯隊というのはもともと山形だが、山形には一日も勤務したことはない。もう満州の東部国境警備の部隊だ。それで、たまたま、隊付中に陸軍の大編成改正があつた。明治以来、師団は四個歩兵聯隊だったのに、それが三個歩兵聯隊になつた。だから、一個師団から、一個聯隊ずつ、全部抜かれた。三三聯隊は、東北八師団だ。その頃、八師団は、綏陽といつて、満州の東部国境の綏芬河と北鮮羅津、あのちようど真ん中ぐらい。綏陽におつた。

その付近に第八師団隷下としておつたのが、それから聯隊が二四師団の隷下になつた。二四師団というのと、ずっと北だ。牡丹江を越して、牡丹江から一日掛かりぐらい北。で、ずっと部隊移動で、その密山というところに移動した。士官候補生の時に、そこに移動して、それで所属も八師団から二四師団になつたわけだな。そして、そこから士官学校に戻つた。

だから、満州の東部国境の密山というところにおいて、少尉になつて、聯隊本部付聯隊旗手だ。それまでは九中隊におつたが、三大隊は第一線警備で、本当に国境線におつた。聯隊主力は一〇キロぐらい後ろにおいて、聯隊旗手で聯隊本部勤務になつた。兵隊さんの徴募区も、二四師団は東北から北海道になつた。北海道になつたので、前期教育は、聯隊から北海道へ、教

官、助教、全部行くようになった。同期三名おつたが、後二人は喜んで旭川へ行った。聯隊旗手だから、俺は行くわけに行かん。残されとつたら、その聯隊旗手が終わる頃、戸山学校の学生、将校学生一名（の入校枠が）来たわけだ。

そしたら、他の同期生は旭川へ行って、おらんものだから、僕が戸山学校に行くことになった。それで、聯隊旗手も、すぐ五六期に替ったんだ。それで、俺は戸山学校へ行った。戸山学校も一般学生は半年だ。一個聯隊から一人ずつで、全部で六〇名か七〇名ぐらいおつたから、内地の歩兵聯隊はもちろんだが、満州、支那からも来たんじゃないかな。それで、七〇名ぐらいの一般学生の中から、一三名が長期学生に残された。長期学生も約半年である。

長期に残る間、一週間ぐらい休暇があった。その時、その休暇で沖繩に帰ったんだ。親父は幼年学校一年の時に死んだから、長男の俺は桑江家の方が六世目で、馬氏の方になると一六世目になる。今じゃ考えられんかも知らんが、昔は家というのが基礎なんだな。たとえばね、戦国時代の群雄割拠のあの頃を見ても、家を保つためにはどうすれば良いか。これがもう、一番なんだ。それだから、親子、兄弟相謀って、敵、味方に分かれる。敵、味方に分かれりゃ、どっちが勝つても、どっちかは生きるんだからな。いや、本当にそれをやった。

そしたら、馬鹿な大将は、わざと親子、兄弟がぶつかるような部署をする。知恵のある大将は、わざと避けるようにしてやるんだよね。いや、それぐらい、家というのが大事だった。だから、桑江家も弟達はおるんだが、やっぱり跡継ぎというかね。いや、俺は「お袋は偉かったなあ」とつくづく思うんだが、お袋が「嫁さんを貰いなさい、貰いなさい」って強く言うもんだから。大体、その時代、士官学校におる時も、お互い同士（が知り合う機会）もないもん。第一線の消耗品をもって任じると

んだから。お袋があんまり言うものだから、女房と（笑）。

■メレヨン島派遣を巡る思い出

桑江　それで、卒業の時、一八年の暮れか、妻を連れて満州の部隊に帰つたら、二ヵ月も経たんうち、今度は、うちの大隊が南方派遣。その時、同期生が聯隊に二人おるんだ。二中隊長の大山（昇一）と聯隊砲中隊長の三好（清彦）というのがおつた。女房を連れて来た僕が出る番に当たったんじゃないやろ。（同期生が）「おい、桑江、代わられるものなら代わりたくない」「俺だつて、代わられるものなら代わりたくないんだが、そうも行くまい」ということで別れて、それで、その三大隊がメレヨン島に行ったわけ。

これもね、軍の統率という意味では……。これは「口号演習」という名前だった。「口号演習編成、中隊長以下一〇〇名」。二〇〇名おる中隊長が、まさに中隊長真つ二つだ。「今度の口号演習参加、誰々々」と、一週間ぐらい前からね。おまけに、これは、「今度の演習は、名前は演習だが、演習じゃない」と、兵隊さんまで分かるのが、個人装備火器。関東軍は三八式歩兵銃だが、それを返納して、九九式歩兵銃が交付された。

当時、昭和一八年の暮れ、全陸軍で三八式を持つるのは、関東軍と支那派遣軍。後、内地部隊と南方軍は九九式だ。三八式歩兵銃を返納して九九式を貰うということは、南方に決まるとるな。「内地へ凱旋じゃないんだ」と、兵隊さんだつてそれぐらいは分かつとる。いや、そういうことだもんだからね、いよいよ出発の前日、送壮行会という中隊で飲んだんだよ。初めのうちは軍歌演習とか何とかやってたが、夜中過ぎたら、行く者、残る者、抱き合つて泣いとる。同じ中隊には、同じ村出身のおる。一週間ぐらいに「今度の演習参加、誰々」と言う、選に漏れたのが血書嘆願。血書をして、「演習に連れ

て行つてくれ」と言う。それを、なだめたり、すかしたりね。いや、これ、何故、そんなことを言うかという、昔でも建制の維持、建制を保つ、これ喧しく言われた。言われたが、どうしてもそういうふうには。いや、後から考えりや簡単なんだが。四個中隊あるだろう？ 二個中隊だけを真つ二つにして四個中隊にして行けば、もともとの中隊は違うかも知らんが、同じ戦場へ行くんだから、そりや、その方がよっぽど良い。

ところが、結局、我が中隊は、まあ、主力はメレヨン島へ行つたが、残りは、あっち取られ、こっち取られだ。今の自衛隊だつてそうじゃないか。ペルシャ湾派遣の落合（駿）海将補は、防大時代、うちの大隊におつたよ。沖縄復帰の時、おそらく本人が希望をしたんじやろうね、沖縄地連の名護の募集事務所長だつた。初め、沖縄地連は、同期の又吉（康助）が部長で、部隊の中にあつた。地連本部で会議か何かあると、名護から出て来る。帰りに、必ず俺のところへ挨拶に寄りよつた。

その頃、名護募集事務所は、毎日、デモを受けとるんだ。「おい、落合、毎日、大変だな。たまには息抜きに、今晚泊まつて行け。一緒に飲もう」と言つたら、「いや、お志はありがたいが、また明日もデモがありますから」「そうだな」と言つて。その後、俺も自衛隊を辞めて、自衛隊父兄会長をしとつた。方面隊の父兄会長会議があつて熊本へ行つた時に、落合が長崎の地連部長をしておつた。沖縄の泡盛を持って行つて、「おい、落合、今日、うちの部屋に來い。一緒に飲もう」と言つたら、「長崎の方の父兄会長と飲む約束がある」と言うから、「じゃ、それが済んでから來い」と言つたら、「一〇時か一一時頃に來たんだ。それから明け方の二時か三時頃まで飲んで、沖縄での約束がやつと果たせたんだ。」

あの頃、その落合がペルシャ湾へ行つただらう。帰つて来て、講演して全国を回つたんだ。沖縄にも來つたから、一杯飲ん

だ。「おい、落合、今度のペルシャ湾遠征で、何がいちばん困つたか」と聞いたら、何だと思ふ？

その時には、落合は呉の掃海隊司令だ。いちばん困つたのは、部下の掌握。自分の部下の掃海艇はわずかに二隻で、後は、横須賀から二隻、佐世保から二隻。しかも、横須賀、佐世保から來る四隻は、その艇長すら知らん。初めて顔を合わせたのが、大島沖で全部集合した時らしい。ペルシャ湾に行く途中、あちこち寄つて行つただらう。「これじゃいかん」ということで、その港に寄つたら、何とか通信とか言つて、お互い、まず顔と名前を覚えることからね。何故、それなら呉の自分の掃海群の中から六隻連れて行かなかつたのか。それは落合のせいではない。もつと上層部の問題だ。「我こそは、我こそは」の考え方が強過ぎるからだ。いちばん大事なのは、その部隊指揮官が指揮ができるか、でせんか。それを考えれば、他の「俺も、俺も」というのは、「お前ら、待つとれい」と抑えて、順番が回つて來たら「行つて來い」と、上の方で抑えんといけない。たとえば、陸がチモールへ行く。あれは方面の混成だ。とにかく、いちばんいかんのは、混成というのがいちばん困るんだよ。お互い知らんのだからな。名前も、性格も、まして家庭の事情だ何だ。

だから、昔から「建制の保持、建制の保持」と言われた。たとえばメレヨン島辺りもそうなんだ。あれも一個大隊。

松山二二聯隊が、四国の一師団から抜けて、二四師団に。それは、まあ、兄弟聯隊だからまだ良いんだが、後、一個聯隊、八九聯隊は、満州にあつた独立守備隊を三個寄せ集めた、本当の新編部隊だ。

いや、八九の聯隊旗は、新品の軍旗だから重いんだぜ（笑）。うちの三二聯隊の軍旗は、明治三一年以來だから、もう總（ふさ）ぱっかりなんだ。總どころじゃないね。あの写真、あれは、久留米の幹部候補生学校には、資料館か何かあるでしょう。そ

ここに旧軍の各聯隊の軍旗の写真があるはずだ。まあ、軍旗何十何百じゃろうな。その中で、本当に負傷した軍旗って、うちの三二聯隊軍旗だけではないか(笑)。いや、本当にね、うちの軍旗は、竿に包帯が巻いてある。軍旗が納めてあるのは聯隊長室だからな。一遍ね、聯隊長がどこか行っておらん時に、あの包帯を取ったことがある。取ったらね、竿の半分、弾で掠まっている。それで、聯隊の歴史を見たら、日露戦争黒溝台会戦で聯隊旗手が戦死しとる。聯隊旗手、胸部貫通銃創。だから、持つとるとこをやられた。いや、聯隊旗はあれだけあるがね、本当に負傷した聯隊旗というのは、俺、他にないと思うね。あれ、久留米に行った時、一遍見てごらん。三二聯隊軍旗だ。

それで、メレヨン島に行ったわけだ。行ったら、これまた。それまでね、マツカーサーは「島伝い作戦」をやった。島伝いとはどういう意味かと言うと、島から島へ、その間隔は、いわゆる戦艦機の行動半径。戦艦機の行動半径であれば、爆撃機が後ろから飛んで来て、戦艦連合で叩いた。それで叩いた後に上陸。だから、これで来とったわけだな。内南洋、外南洋、日本の南洋委任統治領、あれ全部が、陸軍はサイパンに司令部があった。三一軍だ。

山口 はい、小幡中将の。

桑江 そう。小幡英良が軍司令官。我々がサイパンを出る時、港まで来られたんだよ。その頃、サイパンは、爆撃も何も、全然受けとらん。メレヨン島は連日猛爆撃だ。「諸君は、連日猛爆撃下のメレヨン島に、勇躍、これから着任する。ご健闘を祈る」と、小幡軍司令官は言われた。聞いているこっちの方は、坊さんのお経の声を聞いているみたいなんじゃ(笑)。いや、本当のこと。それで、案の定、上陸したら、ばかばかと叩かれて。ただ、あの作戦ね、簡単な話だが、あれは日本軍が裏をかかれた。いや、戦艦機の行動半径で来るもんだと思うとった。

まさかサイパンに直接来ることなんていうのは考えてなかった。その前に、逆にミッドウエーでやられたのを、基地航空には敵わないというふうにとったわけ。ミッドウエーの基地航空には敵わないというふうにか、とにかく、浮いとる艦隊は基地航空には敵わないという印象。だから、絶対に直接来ることはないじゃろうと思うとったところへ来たわけだ。

とにかく、あの頃は、日本も、アメリカも、艦載機の行動半径は大体六〇七〇キロだ。夜のうちに入って来て、朝方、飛行機を発艦させると同時に、一目散に逃げる。日本軍機も、飛び上がって、追っ掛けて行く。後、四〇五〇キロ行けばやれるのに、その頃は、まだ、後々の「片道特攻」なんていう段じゃないから、基地へ帰る。

それで、また翌日も、夜のうちに来てやる。そうすると、二日間の爆撃で、大体、サイパンやテニヤンの基地航空をほとんどやつつけたもんだから、一三日からは、もう目の前に、戦艦、巡洋艦、全部並べて艦砲射撃。その頃は、日本軍の飛行機はもう全部やつつくとるから、それは飛んで来ない。それで、一一、一二、一三、一四とやって、一五日に上陸。だからもう、完全に、米軍はサイパン島へ行ったということが分かった。それで、こっちは助かったわけだ。助かったと思うたら、大間違い。飢え死に。

山口 うちの史料庫に保管してあります先生の手帳を、全部見させて頂きました。

桑江 この前(会った時)、あの話、言ったかな。メレヨン島の資料二冊を、わざわざ(防研から取りに)来た。

岡田 広瀬(豚磨)さん?

桑江 あげたよ。一佐だろう。

岡田 あれは二〇〇三年か四年? もっと最近ですか。

桑江 若いのもおったと思う。若い方は西尾(修)さん。

夫人 二人見えた。一人は、何か、沖縄にも勤務したそうです。

桑江 一佐と三佐かな。

岡田 割と最近、三、四年前ですか。

夫人 ここ一年？

岡田 もっと最近でしたか。手帳の現物を頂いたのは二、三年前ですか。どなたが見えたか。

夫人 資料を全部まとめてね。

岡田 (史料庫に)入っております。

桑江 調べりゃ、その一佐の名前も、三佐の名前も、分かるんだが。

山口 どなたが行かれたんですか。当時の一佐だったら。

夫人 お二人、見えたんです。

岡田 帰ったら、ちよつと聞いてみます。

夫人 確か、お若い方は沖縄勤務もされたそうです。

桑江 あの資料から、抜粋というか、要点は朝日新聞社から出した『メレヨン島 生と死の記録』(朝日新聞社編・一九六六年)に書いた。

山口 拝見させて頂きました。何年も前ですが、読んだことがあります。

桑江 それに「一中隊長の記録」ね、僕のが載っていたでしょう。それは僕の資料のごく一部だ。

山口 抜粋ですね。

桑江 あの資料ね、名古屋の医者で高田という方が、その本の出版の時、「これは」と思っていて、買ったが、すぐには読めんで、だいぶ経ってから、暇になったか何か知らんが、それを研究し出した。これも、戦史というんじやなくて、栄養学の立場の研究資料として読んでいる。そうすると、確かに、言われりゃその通りだが、(飢餓に関する)実験値がないと言

う。

山口 実験するわけには行かないですし。

桑江 何かね、監獄で四名の囚人を死ぬまでやった記録があるとか言う。これ、四名どころじやない。一〇〇名の、もともと

強い軍人。現役兵が大部分。しかも、メレヨンの場合は、盗んで食うぐらひはあったかも知らんが、ほとんど他からの食糧と

いうのは手に入らん。それで、毎月体重を測る。それで死んで行く。八割まで飢え死にで死んだもんね。その記録があるわけ

だ。

だから、「しまったな」と思った。終戦になってから、「書類を全部焼け」と言われた。持って帰ったのは、どうしても焼

くに忍びんで持って帰ったが、もつといっぱい(記録があった)。

本日に、「炊事で、木の葉をどれぐらい」「野菜から何

から」、毎日(の記録が)。それ、膨大な量があったよ。それは焼いてしもうたがね。あれでもあったらな。いや、だから、

あの記録は、その高田というお医者さんが(関心を持った)。

あれ、名古屋に行ったのはいつだったか。二、三年前か、四年前か。

夫人 学会は、四年ぐらい前。

桑江 四年前かね。名古屋で学会があった。

夫人 内科の学会。

桑江 それで、飛行機賃から向こうのホテル代まで出してくれて。それよりも、その年は桜の前線が遅くてね。遅くて、ちよ

うど行った時、名古屋にぶつかって、桜が満開だった。いや、

まあ、それは行って良かったと思うな。

たとえば、その学会での質問。「歩兵中隊が戦地へ体重計を

持って行ったんですか」という質問。僕は、その質問をした医

者の方が良く気が付いたと思うよ。高田君も、沖縄に四回も来

たよ。何回も来て、資料を写真に撮ったり何したりしとるのに、

それだって聞いてないんだ(笑)。ぶいっと向いて、「桑江先生、その点はどうでしたか」と聞く。「良い質問だ。戦に行くのに、歩兵中隊が体重計なんか持って行かん。体重計でも持つて行くなら、鉄砲の弾でも、食糧でも、持って行くので、体重計なんか」「じゃ、どうしてそれ(体重測定)を？」と。どうして体重計を作ったと思う？

山口 重さの分かっている、たとえば米の袋とか、そういうものを。

桑江 米の袋？

山口 重さの分かっているもので、天秤みたいなことでやったのでは。

桑江 いや、そんな抽象的なのではなくて、何だ？ 兵器があるじゃない。

山口 いや、それは思ったんですけれども、当時、兵器をそういうことに使って良かったのかなと。では、小銃一丁何キロで？

桑江 兵器は、それこそ錆もさせずに、重量決まっとるよ。機関銃は一ニキロある。小銃は幾らだったかな。椰子の木から棒を下げて、重り掛けて、それで目盛りする。中隊は、これは満州でもそうですし、内地部隊もそうだ。士官学校でも、月例身体検査ってあっただろう。戦闘とか何とかで忙しい時を除いて、満州でもやりよった。

メレヨン島でも、「ずっとおるんだから」と言っって、上陸して翌月ぐらいから体重測定やったよ。それと、南方行きは、全部、乾燥野菜。乾燥野菜に味噌じゃ何だ、それはビタミンが欠乏するな。後々、現地自活に助かったのは、乾燥野菜の乾燥南瓜の中から種を拾い出して植えたのが、芽が出る。だから、南瓜の現地自活。食糧が足りなくならんども、現地自活で南瓜の花とか何とかも。それでビタミンの補給ということ。だから、

後になって、旅団全部が南瓜を植えんといかんという時に、「桑江隊ハ左記区分ニヨリ南瓜ノ種ナラビニ苗ヲ配布スベシ」という旅団命令まで出た。それで、二〇何個中隊全部に、南瓜の種子並びに苗を分けた。それぐらい先手を打って、ちゃんとやっとなった。あの記録はね、防研に何故やったかと言うと、大東(信祐)ておるだろう。

岡田 元戦史部長をされて、もう今は替わられました。

桑江 大東君が、また、(防大)大隊指導官の時の小隊指導官だ。それと、ここ沖繩で第一混成団の団長もしとった。それで、大東君が戦史部長もやっているし、それから。

岡田 靖国の。

桑江 そう。靖国借行文庫。その責任者もやっとなる。大東君に聞いたんだ。「大東君、じつは、あの資料を寄付しようと思うんだが、結局、利用されなけりゃいかん。どっちが利用されるかな」と言ったら、「桑江先生、防研の史料室が利用される」と言うから、「そうか」と。防研の方は、貸し出しをやっとなるのかな。

岡田 本物を皆さんにお見せすると傷むので、今、マイクロフィルムにして、見たいといってお見えになった方には、マイクロフィルムで見せています。もしコピーが必要なら、それから取って頂くということで。実物は、やはり傷みが激しいので。

桑江 マイクロフィルムだったら見れるか。

岡田 お家には持って帰れませんが、その場で見て、「このページが欲しい」と言えば、それを注文に出せばコピーしてもらえろという形にしています。

夫人 最近の機器には、もう付いて行けない。「テレビの解説でも付いて行けないね、お父さん」と言っって。

岡田 でも、やはり実物の持つ迫力というのは、もう全然違うので。

桑江 世の中、便利なほど不便なものはないと。だから、携帯電話すらやらなかった。持つとるのは持つとるんだけど、娘達とだけだというので。

夫人 娘に持たされてるんですよ。ですから、親子の間のみに使っています。緊急な時の連絡のためです。

桑江 なくても、こうやって生きとるから（笑）。どこまで行ったか？

山口 メレヨン島のところで、質問表で言いますと、2番になりますけれども、メレヨンで飢餓のせいで部下をだいぶ亡くされまして、そこで終戦ということをお知りになられた時、どのような気持ちを抱かれたのでしょうか。この後、どうなるか、日本が、あるいは自分の部隊がというところで。

桑江 サイパン戦後、補給がなかったのが、一九年一二月に、初めて輸送潜水艦がメレヨン島に入る。潜水艦というのは、もう、胴体の真ん中は、ほとんど機械だらけだ。その輸送は、米をゴム袋に入れて、デッキに積んで、ぐるぐる巻きにして潜る。メレヨン島陸・海軍部隊七千名。せいぜい定量にして一週間分だ。五〇トンぐらいかな。それが入って来たんだ。

お米も有り難かったが、米以上に、それまでの内地からの手紙が、これはまとまって全部来た。その手紙で、初めて、家内も沖縄に無事着いたということも分かったし、聯隊主力は沖縄にいるんだということも分かったし、一〇月一〇日の空襲で聯隊区司令官も戦死したというのも分かった。故郷からの便りのないのが、半分じゃないな、三分の一ぐらい。今でも思い出すがね、夕方、夕食後、あの浜辺の椰子の木の下で、「みんなに読んでも支障のないものは、みんなに読め」と。そしたら、来なかった者もそれを聞くわけだから。いや、そうしたら、みんな思い思い、「自分にもこういうのが来た。こういうのが来た」。三日ぐらい掛かった。これ、統率だよな。そういうこと

とが、考えてみればすぐ思い付くことなんだが、なかなか思い付かない。だから、そういったことを思い付く人間というのが、それが名統率者じゃろうな。

それで、当時は沖縄も玉砕だ。だから、俺らの日記も六月の末頃、いつとはなしに止まった。あれだけね、僕の人生で一年半も日記を毎日書き続けたというのは、日記の最初に書いてある「自分の不注意や怠慢により、部下の功績を埋れ木にすること勿れ」だ。部下の功績は自分で見とる。それが、ぼこつと自分が死んでもうたら記録に残らんというのでは、埋れ木になつてしまう。それじゃいかんからといって書いてるんだな。それから、減食時代になってから、一人でも余計餓死者を食い止めるというのが、生きる目的になった。それで、二〇年の五月が、餓死者が出た最後だったかな。それ以後は、中隊一八名、一カ月に一キロぐらいずつ、体重が増えて来た。もう、内地から補給がなくても、後、戦が一〇年、二〇年続いても大丈夫。この一八名は持てる。それも目的達成したら、後、書く意欲もなくなつてやめたというのが実情。それで、終戦になった。

終戦の時に考えたのが三通りだ。「部下の後を追って、メレヨン島で腹切る」、「帰って、祖国復帰のために、また頑張る」、もう一つは「輸送船が来た時、どっかに隠れて、生きて一生、メレヨン島で部下のお墓の掃除」。そのどっちとも決まらないうちに船が来た。やっと一緒に乗って帰ったというのが実情だな。それで、もう別府へ揚がってから、「生きて帰った以上は」ということだ。「部下の分まで、また日本の再建のために尽くそう」というのだ。

■沖縄戦での家族の遭難

桑江 それと、その沖縄だ。俺は、男の兄弟は四名いた。俺が長男で、次男が現地入隊で第九工兵聯隊。九師団は台湾に行つ

ただらう。

夫人 武部隊。

桑江 武部隊で、台湾に行った。三番目は県立一中の四年生だ。中学校の四年生、五年生は鉄血勳皇隊で軍隊と一緒にやるから、これは疎開できない。後、いちばん末の弟が、小学校の五年だったな。これは学童疎開で熊本へ行っておる。後、祖母さんとお袋と家内だ。その時のお袋の決心というのがね、「ああ、これはつくづく偉かったな」と。親父が死んでから約一〇年間、この酒屋を切り盛りし、四人の子供を育て。また、祖母さんというのが、酒屋を興したという働き者だろうが、もう、その頃は隠居だ。沖繩戦で死んだんだけど、七四歳だが、背中はまだすぐでね。

山口 当時としては珍しいですね。

桑江 うん。その祖母さんが、絶対疎開はしないと云う。「今さら知らんところへ行って、食い物に・・・」。もう、ちゃんとして、よそでも食い物は困るというのは知つとるんで、「食い物に困って難儀するよりは、絶対疎開しない」と、祖母さんが。そこで、お袋が家内に、「興子さん、あなた、今度の船が最後の疎開船と言うから、これで熊本へ行って、いちばん末の弟を見てくれんか」と。というのは、僕も南方へ行って帰って来ん。二番目もそうだ。後、沖繩に残って全滅したら、熊本のいちばん末の弟が、それこそ天涯の孤児になるわけ。それじゃいかんから、「行ってくれんか」と。「行きなさい」じゃないんだ。というのは、実際にあつたように、「対馬丸」みたいに、船がまた沈められることもある。それで、最後の疎開船で疎開したから生き残った。いや、だから、その時の決心が大したもんだなと思う。そこ（隣室の仏壇）、ちよつと開いてみい。

沖繩で、米軍が上陸した読谷から南の中南部地区で、ああいう戦前からのお位牌がある家というのは少ないですよ。お袋が

ね、あのお位牌と系図、それだけ毛布に包んでお墓に入れとつたから健在。もし、それに貯金通帳等、金目の物が混じつていたら、なくなっていますよ。

それと、余談になるんですが、お袋と弟のお骨は、本物が手に入った。これ、どうしてかと言うとね、酒屋をしとつたでしよう。酒粕が豚の飼料になるんだ。近郊の農家は、大概、二、三匹、豚飼っていた。その酒粕をうちから分けてもらえるもんだから、うちのお袋やら弟の顔も知つとるんだ。二番目の弟が台湾から復員した時、南部戦跡は戦場の跡そのまま。それらをずつと探して、それで、祖母さんはアメリカ兵から保護されて、野嵩の収容所で二三日に亡くなったというところまでは分かった。

だから、二三日っていったら、牛島中将らが自決された日でしょう。まだ、野嵩に行ったって、その収容所で天幕があると何か何とかじゃないよ。野つ原を、ただ囲っているぐらいのもの。その野嵩でね、二番目の弟が、祖母さんが死んだ時に隣にいた人から聞いた話で、祖母さんは最後に何と言ったか。「生まれ国が戦場（いくさば）になった」「戦は外国でやるものだと思つていたら、故郷、自分の生まれ国が戦場になった。夢にも考えなかつた」というのが、祖母さんの最後の言葉。だから、祖母さんは「野嵩」というだけで、埋葬された場所は分からん。お袋は、うちから酒粕を買つとつたのが、島袋というお袋の・・・。

夫人 不拔の塔の近く。何て言つてました？

桑江 それは親戚とか何とかじゃないよ。ただ、お袋の顔やら弟の顔も知つとつた。その人を探し当てた。「あんたのお母さん、弟さんは、どこで死んどつたぞ」と。その人の案内で行つて、遺骨と遺品を収容した。お袋は、最初はお墓に行つとつた。夫人 お祖母ちゃんと一緒に避難したそうです。

桑江 お祖母ちゃんも一緒に。それで、もう戦も始まって何だから、この住家は閉めて、それで、お祖母さんはお祖母さんで、「手伝いとか何とかできんから」と、お墓に避難して、お袋は弟の部隊と一緒にずっと。軍属でも何でもないんだが、洗濯から、炊事から、それで戦が始まれば、負傷者の看護から、いわゆる軍属みたいにして働いた。それで、最後までお袋と弟は一緒に、六月一七日に解散命令が出て、「どうせ死ぬんなら、首里の家で死のう」と決めたんじやろうな。あるいは、お墓に行けば、「祖母さんが、あるいは生きとるかも知らん」と。それで行って、あの、亡くなったところ。

夫人 六月二〇日じゃない？

桑江 いや、大里部落の前の、黍畑の前で。そこで夜が明けて、機関銃で弟が頭やられたのをお袋が介抱しとつたら、グラマの機関銃掃射を受けた。機関銃掃射で焼夷弾だ。というのは、当時、砂糖黍はうんと高くなっていた。黍畑に潜り込んだ日本兵が狙撃なんかするもんだから、機関銃掃射の焼夷弾で砂糖黍畑全部燃やしよる。

夫人 砂糖黍畑で亡くなって。

桑江 それでやられて、お袋と弟が折り重なって死んどつたというのを、その顔見知りの人が見付けて、それで（二番目の）弟が遺骨を収納した。本当に遺骨が身内の手に引き取られたというの、これまた少ない。だから、ありがたいと思う。

その弟の持った飯盒に、おそらく銃剣の先か何かで、「行き行きて なお行く道のなかりせば 生まれ故郷に死なんとぞ思う」という歌が彫られてた。弟の辞世じやろう。「行き行きて なお行く道のなかりせば 生まれ故郷に死なんとぞ思う」と。首里の家かお墓じやな。「生まれ故郷に死なんとぞ思う」。本物は、焼夷弾のせいかも知らん、真っ黒くなってる。

■復員後の生活

桑江 だから、酒屋をしとつたからね。酒屋は（今の家の）石垣から向こうだ。約三〇〇坪ぐらい。当然、俺は長男として、お袋やら、祖母さんやら、そういつた何（世話）をせんといかん。別府に揚がったのが、二〇年の九月二五日だ。

山口 二〇年の九月という、割と早い方じやないですか。

岡田 いちばん早いですね。

桑江 そう、割合に早い。引き揚げ第一船です。それだけメレヨン島というのが極端になつた。家族の消息を調べたり、遺骨を収集したりせんといかん。九州、別府に上陸したから、沖縄には行けるんだ。行けるが、沖縄に行くには、パスポートだの、手続きをやらんといかん。自分の郷里に帰るのに、パスポートなんて外国並みなことをしては掃りたくない。そしたら、たまたま、次男の弟が台湾から復員して、俺の代わりにいろいろなことをやつとるもんだから、「頼むぞ」と言つて。で、今言つたようなことだ。

だから、「もう、上の屋敷はお前にやる」と。（屋敷は）私ものなんですね。幼年学校一年の時、親父が死んだから。家督相続人は僕だから。お袋はその親権者で、僕の名義になつとる。この畑から、屋敷から、何から。それで、弟に上の屋敷はやつた。その弟が、また運命というのは分からん。あんな丈夫な奴が一四年前か。もう一三回忌済んどる。

夫人 亡くなったのは、平成二年だから。

桑江 一七年前じやな。

山口 そうしますと、当時、沖縄に帰られた弟さんとは、手紙か何かで連絡が付いたんですか。

桑江 いや、それで、今でも覚えとる。お袋と弟が確実に亡くなって、お骨を収集したというのが分かったのが、北海道遺族

訪問の途中だな。

夫人 主人は、鹿児島に復員して来たんです。

山口 鹿児島ですか。さつき別府とおっしゃったんですが。

夫人 別府に上陸して、そして鹿児島に。

桑江 別府で復員業務を終わって。うん、こつちを話さんと、

「何で鹿児島か」と。家内の親父というのがね、これまた、よう兵隊に娘をやったと思うが、親父自身が、もしかしたら兵隊になつとつた。士官学校を受けようと思つたら、「一人息子だから駄目だ」と言われて、それで鹿児島で七高。七高から京大で、弁護士。それで、県議員になり、国會議員に。昭和四年か。

夫人 五年。

桑江 沖縄選出の国會議員となつた。それからずっと（国會議員）。一七年に、大政翼賛会というのがあつた。親父は政友会だ。政友会で行つとつた。戦前の日本は、政友会、民政党という二大政党。今のアメリカみたいなもんじゃ。それが、近衛文麿公が総理の時に、その二大政党を解散して、大政翼賛会というのを創つた。親父は、それに反対だ。「これでもう、日本の民主主義、政党政治は終わりだ」と。だから、大政翼賛会に入らなかつた。一六年に戦が始まつて、一七年に選挙があつた。

いわゆる「翼賛選挙」と言われてるぐらい、大政翼賛会候補者がいっぱい立つた。親父は昭和五年以来当選しとるのに、そういうことで翼賛会に入らんもんだから、それで那覇市長になつた。那覇市長をしとつたもんだから、牛島（満）司令官やら長（男）参謀長辺りとも、よくお付き合いした。

ところが、そのうちに、翼賛選挙で通つた湧上變人というのが、選挙違反で失格になる。当時、「戦雲急を告ぐる」「選挙どころじゃない」もんだから、それで、親父一人に候補者を絞つて、無投票で補欠選挙が行われた。

夫人 一九年四月か五月頃です。ちょうど一月から議会が始まりますので、父は上京して。それで、あの時代ですからね、政府の提出議案はすべてスムーズに通過して、議会は二月初めの頃には閉会になりました。それで、福岡で飛行機待ちたり、鹿児島で船を待ちたりして。なかなか、飛行機は軍に徴用されてしまったので軍属でないと乗れないし、鹿児島にも（船はない）。どれにも乗れなくて、待つてるところに、私達が着いたわけです。それで、父に怒られました。

桑江 今、飛行機という言葉が出たから、話題を転じよう。僕と同じ年頃で飛行機に初めて乗つたのは、おそらく僕がいちばん早いだろう。広島幼年学校に入つて、夏休みに帰つた時、「親父がちよつと痩せとるな」とは思つたが、別に体のことで気に掛かるようなところもなかつた。秋になつてから、「チチキトク スグカエレ」って電報が来たわけだ。電報が来たので、生徒監は、鹿児島まで出て、鹿児島から船で帰る計画を作つた。船は鹿児島から三日に一回ぐらいしか出ない。しかも、鹿児島を夕方出て、翌日昼に大島に着いて、荷物、乗客を積み替える。また出て、翌々日の朝に那覇に着くんだ。「それじゃ、親の死に目どころか、初七日にも間に合わないんじゃないか」と思うとつたら、家から電報が替で五〇円送つて来た。当時、昭和一年というとね、小学校の先生やお巡りさんの初任給が二〇円の頃だよ。その頃、福岡と沖縄の間の飛行機賃が幾らだったか記憶にないが、とにかく乗つたんだから。

こう言つちや何だが、鹿児島経由で沖縄まで帰る計画作つたというのは、生徒監は飛行賃を立て替える金なかつたわけだ。いや、子供心に、その時からね、自衛隊でも同じだが、「やつぱり指揮官というのは、それぐらいの金はいつても持つとかんといかん」と。あの頃の飛行機はフォッカー。単発単葉。操縦手、副操縦手に、お客さんは後部座席三名。それで機内食が出

たよ。福岡の雁ノ巣を飛び立って、柳川の上ぐらいを通った時、副操縦手が「ここの鰻です」と言って、下を指差して、鰻井を配った。

福岡から沖縄まで五時間掛かる。五時間もさることながら、私はこの飛行で親孝行息子になった。というのは、昭和十一年でしょう。福岡―沖縄―台北、あの航路が日本航空にできたのが昭和九年だ。確かその頃、フランスのジャビー（アンドレ・ジャビー）という飛行士がね、フランスのパリから、世界一周飛行で、ずっとあちこち乗り継いで来て、台北から沖縄に来て、沖縄から福岡へ行く途中、背振山地にぶつかって重傷を負うた。当時、これは大ニュースだよな。それと前後して、「ああ、桑江の息子は、命懸けで親の死に目に会おうと思うて」。ジャビーというのが重傷だから、命懸けでしょうが（笑）。いや、本当に、あの時、死ぬというのは、死んでも親父と一緒にという気があったね。だから、死ぬというものは何も恐いとは思わんが、そのジャビーの背振を命懸けで越して来たというので、孝行息子になったわけだ。

山口 それで、復員して日本に戻られまして、沖縄の方は弟さんにお任せをしたということで、復員後の生活というのは、どのような生活をされてたんですか。たとえば、お仕事はどんなことをされていたんでしょうか。

桑江 義父が市内の磯に家を求めて住むことになった。土地は借地だ。義父がそういう政治家だったから、磯の家というのも大きな家だったな。磯の家も六〇坪はあったろうか。

夫人 建坪で七〇坪近くありました。

桑江 周囲は一間廊下があり、狭いところは半間で、一周すると五〇メートルはあったろうか。

夫人 敷地が二反歩、七〇〇坪でしょう。島津さんの借地なんです。島津家の、今、ガラス工場ができていますよね。磯公園

の隣、集成館の近く。あの辺は、全部、島津さんの借地。

桑江 家に関連して、畑が一反歩ぐらいあった。畑と、後は闇商売か。

山口 闇商売やられたんですか。

桑江 闇商売しなきゃ、食って行けんもん。

山口 具体的には、どんな商売をされたんですか。

桑江 具体的には、そうだ、留置場か。別府で。

夫人 黒砂糖を持って行った。

桑江 黒砂糖を別府で売ろうと、別府に行ったら捕まって、それで一日目は、たまたま、そこ。（君達は）留置所（に入ったこと）はないだろう。（自分は）経験者。そういった経験もある。

あの時ね、俺は、今でもそうだけど、越中樺だった。越中樺は、今でも日本人の発明した三大発明の一つだと思ってる。

これには困ったが、留置場に入れるのに、パンツはパンツで良いんだが、越中樺は全部没収と言う（笑）。

山口 そしたら、もう樺なしで？

桑江 一晩かな。それで、何日も入れられとる奴がおるだろう。

日にちを、ちゃんと爪でね、壁に書くんだ。こうしてね。

夫人 結局、あまり詳しくおぼえていませんが、別府で帰されました。父が弁護士でしたので、身元引受人で、即帰宅したように記憶しています。

桑江 翌日か、翌々日か、釈放になったが。釈放になって、出た途端に、俺は闇米の握り飯を差し入れた。そしたら、その時、初めて分かった。（係官が）「誰にですか」と言うから、

「いや、誰で名前は聞かなかったが、僕は、昨日、第何号から出て来た。何号の者みんな」と。差し入れがあるとね、その

分だけ減らされるんだ。

山口 食事をですか。

桑江 官食だ。「そんなら、困る」「いや、そんなら、誰か名

前一人教えてくれ。それで一人宛にやる」と。そうやってやると、もちろん、これは一人では食わん。みんな分けて食うじやろうし、また、官食も、みんなが分けて食うはずじやから。

「誰か一人、名前を教えてくれ」と言つて、それでやった。そういう裏表のいろんな体験をした(笑)。

岡田 そうすると、五二年の予備隊に入られるまで七年間ぐらいは、基本的には、開商売は別にして、どういうことを?

夫人 畑作りをしながら、漁業をしました。父が、もう弁護士開業してましたのでね。で、鹿児島島の七高ですから、皆さん知り合いの方がいっぱいおられて。主人はパージに掛かってますから、公職に就けないんですね。そういうこともあって、父が

「独立国が軍隊を持たないことはあり得ない。第一次世界大戦の後、ドイツは軍隊があった」「必ず軍隊ができるんだから、その時、お前行けよ」と。その時に、経歴に傷があつてはいけ

ないし、それまでね、とにかく父が弁護士でなんとか生活ができましたので、「そのことを心配しないで、お前は畑をやっておけ」というので。生活そのものは厳しかったですけど、それからすると、父に「ありがたかったな」と思います。

他の同期生の方は先生にもなれないし、市役所にも、県庁にも、勤められませんか。ですから、自営業みたいにして、皆さん同期生の方はやつていらしたけど、その心配はありませんでした。

桑江 お義父さんも、あの頃は、「大学、やつぱり行った方が」と。

夫人 それで主人にもね、弁護士に(なれと)。当時は新制大学に移行してましたので、大学の修業年限が3年から4年になつていました。一般教養課程は陸士で修得済みということ、後期の3年に編入されました。だから、「大学の法学部行って、弁護士になつたらどうだ」と、父が勧めてくれたんですけどね、

「自分はメレヨン島で兵隊さんを亡くして、そんなことは考えられないから。お義父さん」「あ、そうか。君がそう言うのなら良いよ」と言つて、父もそれ以上は、やつぱり、復員した時は、まだ二四ですからね。父としても、何となくかわいそうというと変だけど、そういうことがあつて。弁護士でやつて行けるし、私や家族は鹿児島に置いて、「君だけ、東京の大学に行かないか」と、すごく勧めてくれたんです。そして、「自分は、そういう気になれない」と言つて。

■遺族訪問旅行(1)

夫人 それで、東北、北海道を、ずっと四カ月掛かつて、メレヨン島(関連)で遺族訪問に。九、一〇、一一、一二、四カ月。

桑江 四カ月だ。

夫人 北海道をずっと、山の中とか回つて。

桑江 二一年九月一日に出て、帰つたのが大晦日だった。

夫人 大晦日に帰つて。九月一日から出て。

桑江 その間、お袋やら弟も確実に死んだというのは、弟からの手紙で分かった。

夫人 母の保険があつて、生命保険が下りたものですからね。

それを持つて、北海道に遺族訪問に出掛けたんです。

岡田 四カ月ですか。

夫人 それで、「自分としては、兵隊さんをあれだけ亡くしたから、後、どうしようというのは、それをきちんとせんことは、何にも考えられない」と。大学に行くのも勧めたんですけど、行かないということ。で、北海道の方をずっと、山形から。下士官の方が山形でしたからね。北海道は札幌から入つて、四カ月掛かつて、ずっと回つて、暮れに鹿児島に帰つて来た。

それから、二反歩ぐらいの畑があつたから、そこを。メレヨン島で(農耕を経験しているのだ)。

桑江 今の四カ月の東北、北海道旅行、これでも一冊や二冊の本に優になる。それだから生きとるんだよ。

たとえばね、遺族に「何日にお伺いしたい」と連絡するんだが、あの時、遺族で駅まで、馬なり、馬車なり、あるいはそんなのなくても、出迎えに来とるのつたら、一割もおらん。それで、訪ね訪ねて行きよつたら、軍服ですからな、「兵隊さん、どこへ帰られるか」と言ったから、「いや、この何とかという部落」「気を付けて行きなさいよ」。この前も、あの部落出身の人が三名（峠を越えようとした）。二人は、ちょうど飯時だから、昼飯をお茶屋で使うて行く。もう一人は、「もう、それこそ何年振りに帰るからね、もう一刻も早く帰りたい」と先に行つて、「行つたら、あの峠のところ、熊から襲われて死んでしもうた」と。だから、「兵隊さんも気を付けて行きなさいよ」と言われた。こつちも気を付けてね、飯盒の蓋を、がらん、がらん言わせながら行くんだが。

その時、どんな知恵が浮かんだと思う？ いや、俺はね、「日本敗れたり」といえども、「まだまだだ」と思うたことがあるんだ。あのな、駅に着いて、そういった出迎えの遺族とか何とかもない。駅というと、大体、そういった部落に郵便局がある。郵便局へ行つて、遺族宛に電報を打つんだよ。あの時、電報が一五字までで幾らだったかな。ほんのわずかだ。そうすると、電報を打つて、郵便局の前で待つとると、電話も何もないから、郵便局員が配達に行くんだよ。「ちよつと、ちよつと、どこへ行かれますか」と言つたら、「どこどこ」「ああ、僕もそこへ行くんだから、一緒に行きましょう」（笑）。わずかな電報代で、警護付き、道案内人。「日本敗れたり」とはいえ、「まだまだだ」と、つくづく思った。

そういうふうな、たとえば遺族訪問でもいろんなね。ちょうど、北海道は聯隊区司令部四つに分けられていた。函館、札幌、

旭川、帯広だったかな。札幌聯隊区が二四師団の担当区になっていた。たとえば、あの頃、炭鉱地帯は景気が良くて、「掘れば何とか黒ダイヤ」なんて歌にもあった。庶民は食うや食わずの頃、「わざわざ、隊長さんが鹿児島から来られた」と言つて、赤平炭鉱やら、今は潰れた夕張炭鉱から、タクシー借り切つて札幌まで。それで、札幌一流の料理屋でご馳走になつて、またタクシーで帰宅。こつちは、食いはぐれた時のために、外食券ぐらい用意してるといふ時代なんだ。

それから二〇年後、滝川の連隊長で行つた。陸幕もそこまでは知らんよ。そこまではというのは、あの付近は札幌連隊区で二一年の九月から一二月にかけて、ほとんど歩いたところだとは知らんよ。知らんのに、そのど真ん中の滝川に来たということは、「亡くなった部下の霊が呼んだんだ」という気がする。と同時に、二〇何年前、終戦直後、あれだけ炭鉱景気で沸いとつたのが、わずか二〇何年後に景気が悪くなって、炭鉱は、それこそペンペン草が生えとる。滝川の連隊長で行つて、「おい、四〇年増（としま）の美人を見るには、どこ行けば良いか？」と。誰も当たらん。「炭鉱地帯へ行け。『着飾った美人』も良いかも知らんが、あのペンペン草の生えとる『うらぶれた美人』というのがまた良い」（笑）。お陰で、二度、お焼香をすることができた。やっぱり運命だね。

■警察予備隊への入隊

山口 昭和二七年に警察予備隊ができました、今までのお話ですと、軍の再建の日が必ず来るので、その日のためにということ、そういう動機で志願されたということでもよろしいですか。桑江 はい。鹿児島におつてな、士官学校の同期生が鹿児島にはいっぱいおる。予備隊に行く奴に、「何だ、お前ら。数年前まで敵だった、その敵の手先になるのか」という奴と、それこ

そ同期生会で喧々囂々よ。「それは犬の遠吠えじゃ。犬の遠吠えは、外で吠えとるだけで役に立たんぞ」「警察予備隊というのが本当にそういうことであれば、入って、中から変えれば良いじゃないか」と。

俺は、レントゲンを二回撮ったんだ。指宿の結核療養所に入つとる同期生が受験に来た。「おい、桑江。僕、自信がないから、代わりに撮ってくれ」と。そう言われりやね。いや、その男、初めて会うんだよ(笑)。僕の同期生だと言う。「そう言われりや、嫌とは言えんな」と、撮ったんだ。それで、撮ったら、あいつも合格したんだ。それは合格したが、今度は久里浜の総隊学校の入校式の時に、また身体検査がある。その時は、どうしても代われんで、チェックされとる。いろいろ調べてみたら、衛生担当の陸曹というのが鹿兒島出身だ。「ようし、そいつに一杯飲ましてやれ」と。「おんしや鹿兒島やってね」「はい」「俺も鹿兒島だ。おい、今晚、飲みに行こう」と、そいつを連れ出して。それで、飲ましてから、「じつは、お願いがある。あの写真をこれと取り替えてくれんか」「はいはい」と(笑)。それで通った奴が、これも死んだな。いや、ちゃんと自衛隊は定年までやつとるんだから大丈夫だ。

岡田 先生が予備隊に入られた時というのは、もう保安隊になる直前で、大佐クラスの方がようやく入れるようになった時ですか。

桑江 何？

岡田 旧軍の大佐クラスの方が、ようやくパーシが解けて入れるようになったのは、確か五二年(昭和二十七年)。

夫人 二六年、最初の受験ですね。あなた(の入隊は)、二七年。二六年に受けたんですよね。

桑江 二六年は、入らなかつた。

夫人 だから、二六年にあなたは受けたけど、試験官と喧嘩し

て。

桑江 そうだそうだ。あの時、何で喧嘩した？

夫人 試験官の「アメリカの日本の占領政策について、どう考えますか」の質問に対して、「極めて下手だ」「だから、こういう予備隊を急いで作らなくてはならなくなった」と答えたそうです。それで二六年は不合格でした。

桑江 二六年に追放解除というか。

夫人 パーシが解けた。

岡田 そうですね。先生方の尉官のクラスのパーシが解けて。

桑江 ああ、思い出した。山口県の津の島のイワシ網。そこら辺が、また面白い。漁業もしとった。最初は串木野でイワシ網(漁を)しとった。串木野で三年ぐらいやったかな。すると、

串木野に、山口県の津の島から船が来とって、その中に陸士五六期がおった。そいつが「津の島は獲れる」と言うもんだから、「それなら津の島でやろう」と言って、その島に網干し棚とか何とかも仕入れ終わつたところで、追放解除になって受けられると言う。網干し棚とかの経費が五、六〇万だったかな。それ、「只でやるのも、もつたないし」で。聞いたたら、「また来年も採用はある」と言うので、半信半疑だったもんだから、どうとう試験官と何かで喧嘩してね。

夫人 何か、アメリカが日本の軍を解体したでしよう。「それをどう思うか」と試験官の方が聞いたんですって。そしたら、それに手を挙げてね、「それは下手だ」と言ったそうです。それで、朝鮮戦争が始まってますでしよう。「だから、慌てて、こういう、軍隊とも、警察とも、訳の分からんようなものを、急いで作るようになった」と。

桑江 そうだった。「訳の分からんような」。警察予備隊を受けるというのに。

夫人 喧嘩して、二六年は駄目なんですよ。それを、家に帰つ

て来て、父に話したらね。

桑江 親父から叱られた。

夫人 叱られて、「お前ね、予備隊に入隊して、中で意見を言
って、初めて意見を通るんだよ。議員でもパッチがないとね、
いくら意見を言っても、それは犬の遠吠えだ」。そういう父で
すら、厳しい体験があるもんですから、「中に入って、ちゃん
と物を言わなくちゃ。外から何だかんだと言ったって、それは
犬の遠吠えで、やって行けない」と。

桑江 同期生会ではそんなことを言っとるのに、今度は親父か
ら言われた。

夫人 それで、今度は、二七年の試験の時は、もう、「はいは
い、はいはい」と言って。そんな感じなんです。「とにかく、
入ってからのことを言え」「いくら、お前がね、警察予備隊だけ
批判したってね、それは通らん」「中へ入ってせんと駄目だ
よ」って、父に言われて、「ああ、そうかな」と思い直したん
じゃないですか。そういう経緯（いきさつ）があるんです。

桑江 お前、よく覚えとるな。

夫人 だって、それは、あの頃は必死で。今だって必死。

桑江 こっちは、半分以上忘れたのに（笑）。

夫人 いや、主人が復員して帰って来まして、私に言ったこと
は、「自分は、兵隊さんを亡くした」「八二人、兵隊さんを亡
くしてしまつて、それで生きて帰つて来た」「一度、自分は死
んだ人間だから、これからの余生は、とにかく、自分が年取つ
てあの世へ行った時に、兵隊さんに『君達よりもこれだけ長生
きして来たけれど、祖国のために、君達の分もちゃんとやって
来たんだよ』ということが報告できるような人生を、自分は送
りたい。だから、お前も協力してくれ」と言つて。復員して帰
つて来て、私に会った時の言葉なんです。私も「ああ、そうで
すか」と。復員してきた時に、そう思いました。「これはもう、

こういう宿命だな」と思つて。それが私達夫婦の基本的な生活
の基盤で言うんですか、それになつていゝんです。ちよつと大
袈裟なことのようですね。やっぱり、そういう意味で、
「ああ、これはもう、良い加減なことはできないな」というこ
とを私自身も。だから、私にも厳しいです。

■米軍との交流

山口 だいぶ時間も押して来ましたので、今日の最後の質問と
します。戦争が終りまして、沖縄に関する政治的な動きとし
まして、一つはポツダム宣言の「日本の主権が及ぶ範囲」。そ
の中で、「（日本の主権は）本州、北海道、九州、四国及び
我々の決定する諸小島に限定される」ということでしたが、こ
のポツダム宣言の内容は、いつ頃お聞きになりましたか。

桑江 ポツダム宣言というのは何じやったか？

山口 日本に対して降伏を呼び掛けた時に、連合軍が出した条
件なんです。

桑江 連合軍の与えた条件？

山口 はい。連合軍が日本に対して。

夫人 ポツダム宣言って、ドイツですか。

山口 はい、ドイツのポツダムでやった。おそらく、先生は戦
後に。

桑江 日本が受諾したということと終戦になつたんだらう。

山口 そうです。その中で、南西諸島といいますが、沖縄は具
体的に示されていないんですね。九州まで言つて、その後、「そ
の他、連合軍が指定する周りの島」と。

夫人 これ、まだ戦地にいたんじゃないですか。

山口 はい。ですから、出た時には分からなくて。

桑江 そんなのは全然聞いとらん。

山口 日本に戻られて、あらためてこの内容を聞かれたことは

記憶にございますか。

桑江 だから、沖縄もずっと（日本の統治範囲から）除外されているから帰れない。帰ろうと思うたら、外国並みにパスポートを貰わんといかん。だから、帰れなかったんだけど。まあ、それぐらいは分かっていたが、ポツダム宣言のどうのこうのというのは（知らなかった）。あの頃は、メレヨン島で、「自決するか、帰るか」ということを考えとったんだから、そんなことは全然知らんわけだ。

山口 そうしますと、戦後、帰った時には、沖縄は米軍の占領下ですので、もう。

桑江 帰ろうにも。

山口 帰れない？

桑江 いや、帰れたんだ。俺は本籍は沖縄だから。

山口 外国扱いということになったことで、その時には、「もう、沖縄は長いこと、このままになるんじゃないか」というような感覚でしたか。「日本に戻って来るんじゃないか」というような見通しは、ちよつとでも考えられましたか。

桑江 それは世界の情勢だから、どうにもならんことはどうにもならんが、どうにかしようとは、もちろん考えとるわね。どうにかしようというので、警察予備隊へ入ったわけ。

山口 警察予備隊に入って、たとえば日本軍というものを再建したら、それは沖縄が帰って来る一つの理由になるんじゃないかとか？

桑江 いや、まだそんな大袈裟なことまでは考えとらん。警察予備隊に入って、あの頃、何考えとったかな。もう、昔のことは忘れちゃった。

山口 分かりました。この件はご記憶にないということ。それと、昭和二五年、まだ農作業をやられていた頃なんですけど

す。「合衆国を施政権者とする琉球諸島及び小笠原諸島の国際連合信託統治に同意し」という内容が入っておりまして、このことを昭和二五年に聞かれた覚えがございますでしょうか。小笠原諸島、それから琉球諸島をどうするかということが、具体的に示されたものなんですけども。

桑江 いや、直接はそんなのは。今のに関連するからね、この前も在沖指揮官会同で「一言だけ」と言って話したんだよ。アメリカの（軍隊の近くで）沖縄部隊勤務しとると、米軍の陸軍やら、マリーン（海兵隊）やら、空軍やら、いろんなジェネラル、アドミラルと付き合うことがあるな。俺、英語はよう知らん。英語は知らんがね、「この男は」と（いう軍人がいた）。日米安保か何か知らんが、米軍と本当に死生を共にして戦すると（したら）、「この男となら、一緒にやっても良いな」と、あるいは「やれるな」というのが、一人だけ。

それはね、三年前か四年前ね、（第一混成）団の餅つき大会だ。出とったら、マリーンの師団長も四軍調整官も来とった。マリーンの師団長がな、「ジェネラル・クワエ、一緒に写真撮ってくれ」と。「何だ」と言ったら、「いや、ジェネラル・ハウトンに、『ジェネラル・クワエも元気でいるから』って、手紙を出すから」と。ジェネラル・ハウトンというのが、僕が（第一混成）団長をしとる時のマリーンの師団長で、「お前、どうしてジェネラル・ハウトンを知っとるんだ」と言ったら、「いや、ジェネラル・クワエが団長しとる時、ジェネラル・ハウトンの部下のルテナンだった」と。聞いて、俺はまたびっくりしたのは、ジェネラル・ハウトンという男、とうに退役して、それで、サンディエゴの何か奥の方におるらしい。すると、当時の師団長と少尉だ。その少尉が、今でも退役した師団長と連絡しとる。「おお、大したもんじやな」と思った。

というのも、そういった意味ではな、アメリカの中でも、相当、朝鮮戦争辺りでも鳴らした男らしいんだがな。この男は、「こいつとなら、一緒に戦しても良いぞ」と思うた唯一の男だ。彼の着任式に俺も行った。キャンプ・コートニー。それが、ちょうど真夏の昼後の蒸し暑い天候、海兵隊が完全軍装で三千名ぐらい。どれぐらいぶっ倒れる奴がおるかと思うたら、一人もおらん。おまけに、事前にパンフレット（が配られた）。パンフレット見たら、出身地、経歴、戦闘歴、一切書いてある。「ワールド・ウォー・ツーにも参加。ワールド・ウォー・ツー、サイパン・バトルにも参加した」と書いてある。

これは「ご参考までに」だが、自衛隊でワールド・ウォー・ツー参加者はおるんだ。いや、僕も参加した。ところが、こういった離着任の時に、まあ、上司なり何なりが来て紹介したり何たりするが、ワールド・ウォー・ツー、旧軍の戦闘歴などを紹介してくれたのは、離任式の時に西方總監、塚本（勝一）總監が来て、幼年学校以来、旧軍の何（経歴）を、離任式の時にたった一遍だ。自衛隊では言わんよ。何故言わんか。

まあ、そういうのは抜きにして、ワールド・ウォー・ツーにも参加したとあるから、終わってから、パーティーの時、まず褒めてやった。「ジェネラル・ハウトン、今日は感心した。この悪条件下で、ぶっ倒れる奴が一人もおらん。おまけに、前をパレードして行く兵隊の背中を見て、背中に汗の滲み出た奴が一人もいない。『汗かきは弱兵の印』というのは、これは世界共通です。一人もおらん。さすがはマリーン。精鋭部隊だ」と褒めたら、ジェネラル・ハウトンが何と言ったか。「ジェネラル・クワエ、それは当たり前だ」と。「何だ？」って言ったら、「僕は『汗をかけ』と命令を下さなかったからだ」と。もちろんジョークだよ。そういうジョークがぼつと出るといこうところに、いかに精鋭であるかが分かる。

それから、後、見たらサイパン・バトルにも参加したと書いてあるから、「サイパン・バトルの時の階級は何だったか」って言ったら、「インファントリー・カンパニー・コマンドー（歩兵中隊長）で、上陸用舟艇の第一派に乗って行っとなら、日本軍の砲撃でリーフのところまでやられて、海に丸一日浸かった」と。で、「いや、その頃、僕もインファントリー・カンパニー・コマンドーで、サイパン・アイランドの南六〇〇キロのメレオン・アイランドにおったんだ。お前達がサイパンを占領したおかげで、我々は補給がなくなつて、ベリー・ハングリーだった」と。これに、また何と答えたか。「ジェネラル・クワエ、そうと知ったらレーション（携帯糧食）を送つてやったのに」と言うから、「君を知るのが遅過ぎた」と言つて（笑）。いや、そういう会話。それで、彼は日本語を全然知らん。僕は英語を全然知らん。まあ、通訳を介して、今ぐらいのことは言える程度だがね。

アメリカ人でも少ない。これはね、アメリカは第二次世界大戦後、朝鮮戦争、ベトナム戦争、いろんな戦争をしとるが、米軍でもね、第二次世界大戦、ワールド・ウォー・ツー参加者というの、一段上に見とるよ。何故それが分かるかと言うと、副官同士の話。「神繩にジェネラル、アドミラルは一〇名おるが、ワールド・ウォー・ツー参加者は、お前のところのジェネラルと、うちのジェネラルだけだ」と、向こうの（副官）が言うわけ。そういつたところから、アメリカの中でも、「なるほど、そう考えとるな」と。今はどうか知らん。今は変わつてるが、あの頃は、マリーンは師団長以下、単身赴任よ。家族帯同を認めない。ただし、一〇カ月経ったら、自分で呼ぶ分は認めとったかな。一〇カ月目に自費で呼んだら、翌週からベトナム勤務になったとか、いろんな話がある。

そうすると、家族がいらないから。あの頃、マリーンのパー

ティーは六時頃から始まる。六時頃から始まって、三〇分置きぐらゐに、「じゃ、ジャバニーズ・アーミーのために乾杯」、また三〇分ぐらゐして、「ジャバニーズ・エアフォースのために乾杯」「ネイビーのために乾杯」「アメリカ・ネイビーのために乾杯」「アメリカ・エアフォースのために乾杯」、最後に「マリーンのために乾杯」。

「アメリカ・アーミーのために乾杯」がないんだよ。いや、本当になかったよ。ないはずだ。呼んでないんだ。あのね、たとえば、硫黄島のあの旗立てたのも、あれは何だ？ マリーンだ。陸軍とマリーンとの仲は、（米陸軍は）我々の前で直接には言わんが、「マリーンは、あいつらアニマルだ」「だから、ペンタゴンに入れないんだ」と。ペンタゴンに入っとらんよな。「マリーンは、あれはアニマルだから入れられないんだ」と。マリーンに言わせりや、「陸軍の奴は『へなへな』だから、どうだこうだ」ってね。それで、マリーンのパーティーに行っても、アメリカ陸軍を呼んでない。いや、それで、自衛隊の記念日には、アメリカ陸軍も、海軍も、マリーンも、呼んだんだ。それが何（きつかけ）になって、マリーンも（米陸軍を）呼ぶようになったよ。

だから、いつだったか、在日米軍参謀長のリンとかいう少将が来たよ。「在日米軍司令官は、在沖繩陸・海・空自衛隊を表彰せんといかん」と言った。「何だ」と言ったら、「いや、たとえばこういうことで、『マリーンのパーティーには陸軍を呼んどらん。陸軍のパーティーにはマリーン呼んどらん』という状況だった」と。ところが、自衛隊は両方共呼ぶもんだから、「自衛隊のおかげで、マリーンが陸軍を呼ぶ。陸軍もマリーンを呼ぶようになった。米四軍統合の実をあげたんだから、自衛隊を表彰せんといかん」と。「へえ、そうですか」と言っただけど、全然、表彰も何も。表と裏を抉るような、そんな表彰はし

ないよな。

岡田 先生が、戦後に初めて米軍と接触したのは、いつ頃の話ですか。警察予備隊に入られてから？

桑江 米軍とねえ。直接ということはないんじゃないか。

岡田 やはり、沖繩に来て初めてですか。

桑江 うん。いや、富士学校におる頃、演習で一回あったな。

僕は迫撃砲の教官です。そしたら、米軍の将校が来て、何とか言うんだが、意味が分からん。それで、「一緒に来てくれ」と言うから、一緒に行ったわけ。（米将校は）戦車の中隊長じゃ。それで、「ははあ、戦車のこういった部品が自衛隊にはないか」ということを一所懸命に聞いとるんだなと思つた途端に、何と答えたか。「ああ、ミンバイ（「明白」）分かった」と。「ミンバイ」と答えたんじゃないよ。

アメリカ人も笑わない。一緒に連れて行つた助教の連中も、英語ぐらゐに思うとるんだろう。笑わない。一人でおかしくなつてな。いや、僕は外国語といつたら、中学校二年間、英語じやろう。幼年学校三年に予科士官学校一年、四年間はフランス語。士官学校以降、満州におつたから支那語だ。だから、「英語、フランス語、支那語は、もう全部、外国語という概念」で、一緒になつとるから、分かつた途端に「ミンバイ」って（笑）。山口 そうしましたら、今日のところはここまでにしまして、明日、沖繩がいよいよ返還されるるところからお話を伺いたしたいと思いますので、よろしくお願いします。

桑江 いや、今ぐらゐの話なら良いよ。

山口 はい。当時、ご記憶にあることだけで結構でして、「聞いたことがない」ということも立派な証言になりますので。

「当時は、実際、現場の自衛官は、幹部といえども関心なかった」とかいう話も重要な証言になりますので、よろしくお願いします。

沖縄返還の話が具体的に政治の場に出てから、先生は、最初の方は臨時第一混成群の群長として指定されて、そして、团长としてずっと最後まで沖縄におられた。その当時の話を、明日、お聞かせ願いたいと思います。今日は、どうもありがとうございます。